# 12［小説］　『人間失格』

　自分の父は、東京に用事の多いひとでしたので、上野の桜木町に別荘を持っていて、月の大半は東京のその別荘で暮していました。そうして帰る時には家族の者たち、またの者たちにまで、実におびただしくお土産を買って来るのが、まあ、父の趣味みたいなものでした。いつかの父の上京の前夜、父は子供たちを客間に集め、こんど帰る時には、どんなお土産がいいか、一人一人に笑いながら尋ね、それに対する子供たちの答をいちいちに書きとめるのでした。父が、こんなに子供たちと親しくするのは、①めずらしい事でした。

　「は？」と聞かれて、自分は、②口ごもってしまいました。

　何が欲しいと聞かれると、とたんに、何も欲しくなくなるのでした。どうでもいい、どうせ自分を楽しくさせてくれるものなんかないんだという思いが、ちらと動くのです。と、同時に、人から与えられるものを、どんなに自分の好みに合わなくても、それをａ拒む事も出来ませんでした。イヤな事を、イヤと言えず、また、好きな事も、おずおずと盗むように、極めてにがく味わい、そうして言い知れぬ恐怖感にもだえるのでした。つまり、自分には、二者選一の力さえなかったのです。これが、後年にり、いよいよ自分の「恥の多い生涯」の、重大な原因ともなるｂセイヘキの一つだったように思われます。

　自分が黙って、もじもじしているので、父はちょっと③不機嫌な顔になり、「やはり、本か。浅草のにお正月の舞いのお獅子、子供がかぶって遊ぶのには手頃な大きさのが売っていたけど、欲しくないか。」④欲しくないか、と言われると、もうダメなんです。お道化た返事も何も出来やしないんです。お道化役者は、完全に落第でした。「本が、いいでしょう。」長兄は、まじめな顔をして言いました。「そうか。」父は、興覚め顔に手帖に書きとめもせず、パチと手帖を閉じました。

　何という失敗、自分は父を怒らせた、父のは、きっと、おそるべきものに違いない、いまのうちに何とかして取りかえしのつかぬものか、とその夜、の中でがたがた震えながら考え、そっと起きて客間に行き、父が先刻、手帖をしまい込んだはずの机の引き出しをあけて、手帖を取り上げ、パラパラめくって、お土産の注文記入の個所を見つけ、手帖のｃエンピツをなめて、シシマイ、と書いて寝ました。自分はその獅子舞いのお獅子を、ちっとも欲しくはなかったのです。かえって、本のほうがいいくらいでした。けれども、自分は、父がそのお獅子を自分に買って与えたいのだという事に気がつき、父のその意向にｄゲイゴウして、父の機嫌を直したいばかりに、深夜、客間に忍び込むという冒険を、えておかしたのでした。

　そうして、この自分の非常の手段は、果して思いどおりの大成功を以てｅムクいられました。やがて、父は東京から帰って来て、母に大声で言っているのを、⑤自分は子供部屋で聞いていました。

問１　二重傍線部ａ～ｅの漢字は読みを記し、カタカナは漢字に直せ。2点×5

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問２　傍線部①から普段の父の姿とはどのようなものと考えられるか。簡潔に説明せよ。10点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問３　傍線部②はなぜか。理由として適当でないものを次から一つ選べ。6点

ア　どうせ自分を楽しくさせてくれるものなんてないとちらと思うから。

イ　父がこんなに優しいことはなかったので、怖くて正直に言えなかったから。

ウ　欲しくてしょうがないものがあるわけではなかったから。

エ　与えてくれるものを拒む事も出来ないので何でもいいとも思ったから。

オ　自分には選んで決めていく力が不足しているから。

〔　　　〕

問４　傍線部③の父の「不機嫌な顔」とほぼ同じ内容の表現を、本文中から抜き出せ。6点

〔　　　　　　　　　　〕

問５　傍線部④とは何が「ダメ」なのか。最も適当なものを次から選べ。6点

ア　何も欲しいものはないということを伝えることもできず、結局は欲しいものも手に入れられないこと。

イ　父がめずらしく優しいことに違和感を感じ、反感を持ったことが伝わってしまったこと。

ウ　父がめずらしく優しいのにもかかわらず、自分が黙ってしまって、父を悲しませたこと。

エ　父の気持ちを察することができず、本を欲しがってしまい、父を怒らせてしまったこと。

オ　何も欲しいものはないということを伝えることもできず、父を喜ばすための演技もできなかったこと。

〔　　　〕

問６　自分は家でどのように振る舞おうとしていたのか。それが端的に表されている語を、本文中から五字で抜き出せ。6点

〔　　　　　　　　　　〕

問７　傍線部⑤の時の自分の気持ちとして最も適当な言葉を次から選べ。6点

ア　焦燥感　　イ　　　ウ　自信　　エ　無念さ　　オ　悔しさ

〔　　　〕

【解答】

問１　ａこば（む）　ｂ性癖　ｃ鉛筆　ｄ迎合　ｅ報（い）

問２　あまり子供たちとは話さない、（子供にとっては）怖い感じのする父親。

　　　（傍線部の内容がなければ、それぞれ5点減点）

問３　イ

問４　興覚め顔

問５　オ

問６　お道化役者

問７　イ

■覚えておきたい語句

□6　口ごもる………………ためらって、はっきり言わない。

□10　おずおず………………おびえたり、自信がなかったりしてためらうさま。

□10　言い知れぬ……………何とも言いようのない。

□11　所謂……………………世間一般で言われている。

□15　お道化た………………こっけいな。ふざけた。

□23　意向……………………物事をどうするかについての考え。思惑。

□23　迎合……………………自分の考えを曲げても、他に気に入られようとする。

〔場面解説〕

睡眠薬中毒の主人公葉蔵の手記（「恥の多い生涯を送って来ました」という有名なフレーズで始まる）でその半生が語られる小説。本文はその子供時代を振り返っている部分から。人間を極度に恐れ、自分の家族にさえも道化を演じて本当の姿を隠しているような子供だったのである。

〈作者＆出典〉太宰　治（だざい・おさむ）一九〇九年（明治42）～一九四八年（昭和23）青森県生まれ。小説家。戦前戦後を代表する作家の一人。彼の人生は、女性との何回にもわたる心中未遂、鎮痛薬中毒とスキャンダル抜きには語れない。作品は、『百景』『』『斜陽』など。本文『人間失格』は、一九四八年（昭和23）三月から五月に執筆。主人公「葉蔵」の半生が、かなりの部分太宰と酷似しているため、太宰の自伝であるかのように読まれてきた。しかし最近、亡くなった太宰の妻の遺品から大量の草稿が発見され、主人公の人物像を作るのに苦労していた過程が明らかになった。

【読みのセオリー】

★読み広げをしよう

　一つの表現から、一つの読みをするだけで満足しないで、いろいろな可能性のある読みをしてみよう。たとえば、「白い」という表現から「だ、清純だ」という読みと、「弔いの時の色」や「何色にも染まる」というような読みをする。

　また、同じように「なぜですか」と理由を問われても、その理由は一つではないことを考えてみる必要がある。

■読みのセオリー［実践］　　　読み広げをしよう

問３　「口ごもってしま」った理由を、傍線部②の次の段落（7～12行目）から５カ所、短く抜き出してみよう。

［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

〔解答〕

・何も欲しくなくなる

・どうせ自分を楽しくさせてくれるものなんかない

・拒む事も出来ません

・言い知れぬ恐怖感

・二者選一の力さえなかった

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊追加

問１　本文中の傍線部の漢字の読みを記せ。

１　親戚の者たちに。

２　お土産を買って来る。

３　自分の所謂「恥の多い生涯」。

４　復讐はおそるべきものに違いない。

５　蒲団の中でがたがた震える。

６　冒険を敢えておかす。

　　［答］　１しんせき　２みやげ　３いわゆる　４ふくしゅう　５ふとん　６（あ）えて

＊差し替え

問４　傍線部③、不機嫌になったことが端的にわかる部分を、本文中から15字以内で抜き出せ。

　　［答］　興覚め顔に手帖に書きとめもせず（15字）

＊差し替え

問７　26行目「母に大声で言っている」について、何と母に大声で言っていたと考えられるか、30字以内で説明せよ。

　　［答］葉蔵は獅子舞がほしくて手帖に自分で書き込んであったぞ。（27字）